

13 「博物館創設にささげた一生」 町田 久成

「博物館は君が提議し、創設する所なり（博物館はあなたが議案を出して、初めて創られたものです。）これは、東京の国立博物館の庭にある石碑の一節です。



町田久成

江戸時代末、さつま藩と、イギリスとの間に戦争が起こりました。この戦争で、さつま藩はイギリスの軍艦の大砲のい力のすごさにおどろきました。同時に、鎖国によって西洋の国々からおきていることを実感し、イギリスからいろいろなことを学ぶことにしました。そして、藩から選ばれ、留学したのが十九人の「さつま藩英国留学生」です。その留学生の監督として一行を率いたのが、町田久成でした。

イギリスでの久成は、みんなの世話でいそがしい時間をさいて、たびたびロンドンの大英博物館を見学しました。そこには、世界の数多くの古い美術品などが展示されていて、久成は初めて目にする大理石の彫刻・胸像・壁画などの美しさ、見事さに深く感動しました。また、ほとん

どの町に博物館があることにもおどろき、人々が自分たちの文化にはこりを持つていることを感じました。そして、二年目には、フランスの「パリ万国博覧会」にも出向き、そこでも西洋の文明や技術の高さにおどろきました。ルーブル美術館やパリ博物館、植物園なども見学した久成は、  
\*三 「国民開明のためには、図書館や植物園、動物園をもあわせもつ総合的な博物館を創らなければ。」という考えを強く持つようになったのです。

久成が二年の留学を終えて帰国したのは、日本が大きく変わろうとしていた明治維新のころです。その後は西洋の技術や生活の仕方などが盛んにしようかいされたため、人々は西洋風のものにあこがれ、「文明開化」といつてもてはやしました。そして、またたく間に、人々は日本文化より西洋文化を大切にするようになっていったのです。美術品でも日本画などの日本の美術の価値はみとめられず、海外に安くで買われていきました。また、「廃仏毀釈」といつてお寺が焼きはらわれたり、仏像や仁王像がこわされたりもしました。帰国後、政府の仕事をしてきた久成は、「このままではかけがえのない日本の文化財がほ



ろびてしまう。」と考えました。そして、文化財を保護する法律を出し、それらを保存する博物館を建設してくれるように政府に提案しました。また、自らも文化財を買い取り、修理する努力を重ねたのです。

明治五年、久成の努力もあって日本で初めての博覧会が開かれ、その跡地を博物館の建設用地として使うことが計画されました。喜んだ久成は、博物館に納める文化財や美術品の調査をするために、京都・奈良・大阪などの神社やお寺などに出向きました。ところが、四か月にも及ぶ出張から帰ってみると、その計画は変こうされて、博物館建設予定地に学校が建てられていたのです。

「何ということだ……。」

教育のためとは言え、とてもがっかりした久成は、ともすればくじけてしまいそうな気持ちを押しさえながら、調査してきた資料をもくもくと整理する作業に明け暮れました。

それから数年後、久成は内閣から博物館建設についての意見を求められました。再びチャンスがきたのです。そこで久成は、博物館だけではなく動物園や図書館などもそなえた総合博物館の必要性をうったえました。しかし、そのためには多くの建設費用と広い土地が必要でした。そこで、久成は博覧会を開いてその入場料などを建設費用にあてる案を考えて政府に提出しました。

それでもすぐにはみとめられません。久成は案を考え直して提出し、二年後、ようやくみとめられたのです。また、「建設地は上野の山に」と考えていた久成は、同郷の先ばいであり、政府の中心人物である大久保利通おおくぼとしみちに、



上野の山の視察しさつをしてくれるようお願いしました。  
「国民開明のためには、歴史・美術・自然史・図書館、それに動植物園をあわせもつ博物館が必要です。そのためには、上野の山のような広い土地が必要なのです。ぜひご案内させてください。」  
しかし、大久保は内務卿ないむきやう（大臣）という大変重要な仕事をしていたので、とてもそがしく、久成の願いはかなえられそうにありませんでした。それでも久成は、何度も何度も足を運んで一生けんめいにお願いしました。そして、ついに大久保は言いました。  
「町田さん、あなたには負けた。大隈大蔵卿おおくまおくらぎやう（大臣）をさそって、上野に出かけましょう。」

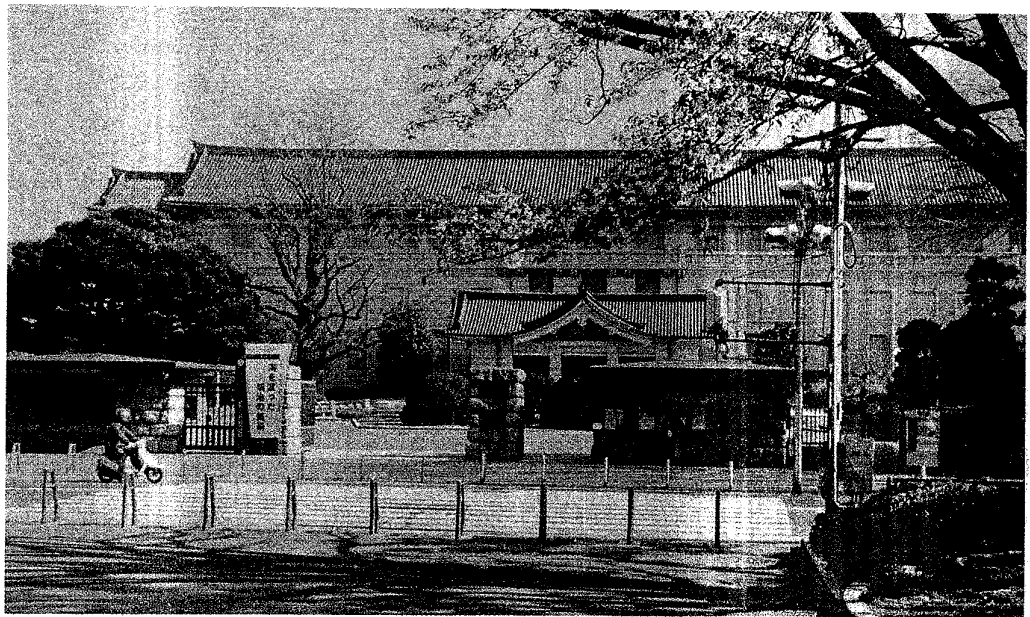
大久保は、国民の知識ちしきを開き、文化を進めたいと考える久成の熱意に心を打たれたのです。そして、建設費用や場所の決定に大きな力をもつ大隈重信しげのぶ大蔵卿とともに上野を視察しました。二人を案内しながら、久成は国民開明のための総合博物館について熱心に説明しました。それから

三年後、上野の山に国立博物館を建設する工事の音が鳴りひびいたのです。

久成が帰国してから十六年後の明治十五年、ついに国立博物館が完成しました。初代館長として開館式にのぞむのは、町田久成。その目からは、なみだがあふれ出していました。



久成はその後、館長をやめてお坊さんになりました。ふるさどである石谷（現在の松元町）の地名をとって「石谷和尚」と名乗り、廃仏毀釈などで荒れはてたお寺の再建に努力しました。そして、久成のもう一つの願いであった文化財を保護する法律が出された明治三十年、それを待っていたかのように六十年の生涯を閉じたのです。



現在の国立博物館

\*二 国民の知恵を高めたり学問を向上させたりして、進歩した世の中にする。